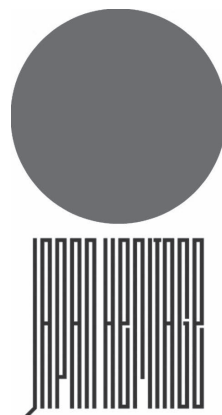




市ホームページの
日本遺産特集は
こちら！



今から800〜400年前の中世という時代の益田をテーマとしたストーリー「中世日本の傑作 益田を味わう―地方の時代に輝き再び―」が、6月19日、日本遺産に認定されました。日本遺産は、「地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリー」を認定するもので、今回の認定を含め、全国で104件のストーリーが認定されています。中世益田の歴史が日本の文化・伝統を語るものとして認められたこととなります。本特集では、日本遺産に認定されたストーリーと、高く評価されたポイントを紹介します。



JAPAN HERITAGE

日本遺産



中世日本の傑作 益田を味わう

― 地方の時代に輝き再び ―

日本遺産 認定

海に国境のない時代―中世。山陰地方の西端のまち益田は、その地理と地域資源を活かして、大きな輝きを放っていました。

人々は、中国や朝鮮半島に近い地理と、中国山地がもたらす材木や鉱物などの地域資源を活かして、日本海交易を進めました。領主益田氏は、自らも交易に積極的に関与し、優れた政治手腕を発揮して平和を実現しました。経済的繁栄と政治的安定のもと、東アジアの影響も受け、どこにもない文化が花開きました。

現在の益田にはその歴史を物語る、港、城、館の遺跡と景観、寺院や神社、町並み、庭園、絵画、仏像などの一級品がまざまざと残っています。

時代と地域の特徴を活かして輝いた益田は、中世日本の傑作と言え、全国でも希有な中世日本を味わうことのできるまちです。



「逆さ地図」に見る益田市の位置（富山県作成の「環日本海東アジア諸国図」に加筆）



- 中世の益田は、地理と地域資源を活かして輝いていた。
- 中世の益田は、流通経済、政治、文化のいずれもすごい。
- そして、中世の益田の遺産が現在にまともに残っている。



益田氏の館・三宅御土居跡



萬福寺庭園

★ ストーリーの詳細

【地方の雄・益田】

山陰地方の西端に位置する益田市は、奥深い中国山地を抱え、日本一の清流・高津川と益田川が豊かな山あい流れ出て沖積平野を形づくり、海岸線には美しい松林の砂州が伸びる、海陸要衝の地です。これらの自然は、美しい景観のみならず、魅力的な歴史も生み出しました。

今から800〜400年前、地方に領主が勢力を誇り、海に国境のない時代―中世の益田は、その地理や地域の資源を最大限に活かして、ひととき大きな輝きを放っていました。



益田平野。手前の日本海に、高津川(右)、益田川(左)が注ぐ。益田川河口の砂州の内側に中世の港町の遺跡(中須東原遺跡)がある。

【日本海に漕ぎ出した益田の人々】

中世の益田平野では、高津川が益田川に合流しており、砂州の発達とあわせて、河口域が潟湖のようになっていました。この地形は日本海の荒波や強風を避ける格好の条件でした。このため、中世の高津川・益田川河口域は港町として賑わいました。



櫛代賀姫神社の境内から望む益田平野。

日本海に沿って複数の砂州が発達していた様子がよく理解できる。

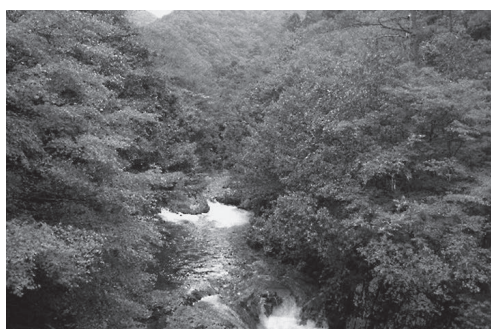
砂州の南側から発見された中須東原遺跡は、そのような港町の遺跡の代表例です。旧河道に沿って石が敷き詰められた荷揚げ場跡の内側に、鍛冶場をはじめとする町場が建ち並ぶ様子が発掘成果から浮かび上がりました。また、出土した陶磁器は、国内はもとより、西は朝鮮半島や中国、南は東南アジアとの交易を物語っています。



華南三彩貼花文五耳壺(萬福寺所蔵) 益田氏の南蛮貿易の可能性を示唆する。



中須東原遺跡の荷揚げ場跡。石が敷き詰められている。



匹見の森林と匹見川。

匹見の豊富な材木は、匹見川・高津川を川下しされ、河口の港から国内外へと輸出され、中世益田の主要な交易品となっていたと考えられる。

Point 二つがポイント

- 益田平野の河口域は天然の良港。
- 上流域の材木や鉱物が交易品。
- 中世の益田の人々は、積極的に交易に取組んでいた。

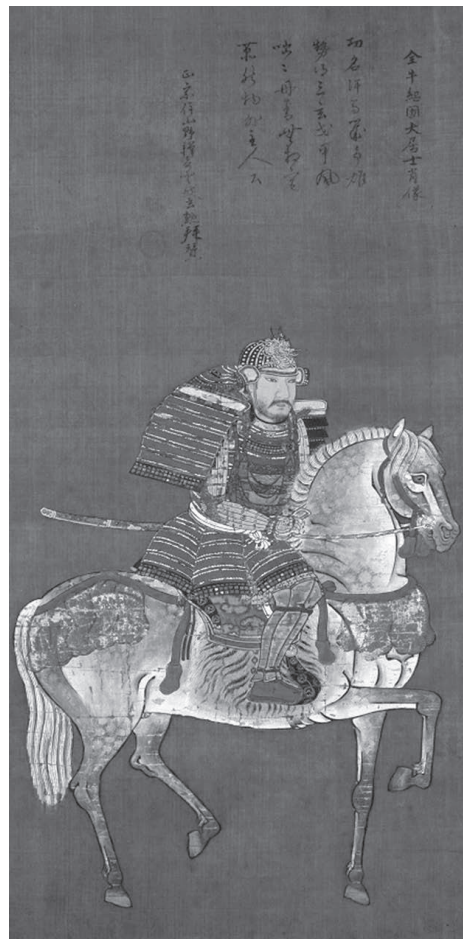
何を輸出していたのかも、河川が教えてくれます。高津川やその支流・匹見川上流の豊かな中国山地、たとえば匹見は良質な材木を豊富に産出します。材木は川下しされ、さらに他地域へと積み出されました。また、益田川上流の都茂鉱山の鉱物も同様に交易品であったと考えられます。

中世の益田はヒトとモノの交流の最前線であり、人々はその豊富な地域資源と中国や朝鮮半島に近い立地条件を活かして日本海に漕ぎ出し、積極的に国内外との交易に取組んでいたのです。

【領主・益田氏の實力】

益田川をさかのぼり、平野部から山間部へと入る手前に、歴史ある町並みが残っています。この町並みを築いたのは、中世の益田を治めた領主益田氏です。

益田氏は優れた政治手腕を発揮して、益田の平和を維持しました。たとえば、戦国大名毛利氏との関係が悪化した後、和睦する際には、朝鮮半島の虎皮をはじめとする莫大な贈り物をし、蝦夷地（北海道）の昆布や数の子、地元の特産品である清流・高津川の鮎やうるかななどを材料にした豪華な料理を振る舞いました。自身の日本海交易への積極性と経済力を印象づける狙いがあったと考えられています。実際、それ以後、毛利氏から一目置かれています。



狩野松栄筆「益田元祥像」桃山時代
(島根県立石見美術館所蔵)

その威勢は、山城・館の遺跡や城下に見ることが出来ます。東西に5mの土塁を持つ館・三宅御土居の遺跡、ひとつの山をまるまる要塞化した山城・七尾城の遺跡は、同規模の領主と比べるとはるかに大きく、また後述する特徴的な形をしています。

ここがポイント

- 領主益田氏は、優れた政治力で益田の平和を実現。
- 戦国大名毛利氏との仲直りの際も鮮やかな手腕を発揮。
- その實力は、山城や館の遺跡からうかがうことができる。

【花開いた独特の文化】

繁栄と平和のもと、もともとの地域の文化に、京都や山口、東アジアの影響も受け、益田には優れた文化が花開きました。

益田氏は、寺社を手厚く保護し、創建した時宗・萬福寺の本堂や、再建した地域の氏神・染羽天石勝神社の本殿は、当時の寺院・神社建築を代表するような美しい形をしています。

平安時代から中世を通じて、時代ごとに個性的な仏像が現存しています。それらは中央の流行を取り入れつつも、地方色も色濃く残っています。

室町時代には、中国に渡って水墨画を極めた雪舟が益田に招かれました。雪舟は萬福寺と崇観寺（後身寺院が医



染羽天石勝神社本殿（奥の建物）



萬福寺本堂

光寺）に庭園を築き、益田兼堯像を描きました。これらはいずれも雪舟の代表作とされ、2つの庭園は四季折々に異なる美しさを見せます。

交易で入手した茶壺等が彩りを添えます。萬福寺に伝わる華南三彩壺は、東南アジアとの貿易で入手したと考えられています。

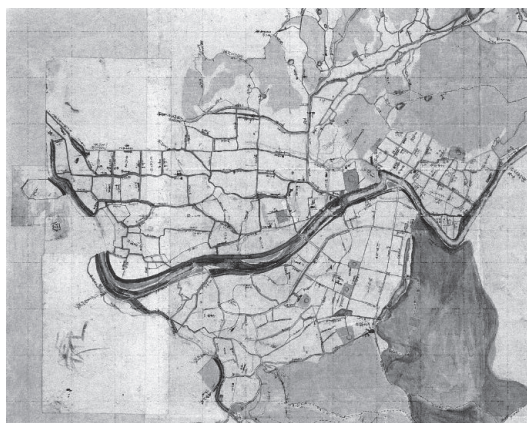
ここがポイント

- 経済的繁栄と平和のもと、優れた文化が花開く。
- 京都や山口、東アジアの影響を受けつつも、地方色も残す。
- 雪舟をはじめ、神社仏閣などが当時の文化水準の高さを伝える。

【中世を味わえるまち益田】

益田氏は江戸時代（近世）初めに残念ながら益田を去らざるを得なくなり、益田のまちは江戸時代の城下町になることはありませんでした。しかし、これにより近世の城下町としての再開発を受けることなく、中世の町並みがそのまま残ることとなりました。

現在の益田の町並みは、日本の他の歴史ある町並みとは少し様子が異なっています。たとえば、長靴を横に倒したような形と言われる館跡や、Y字形の山の尾根に築かれた山城跡、直線と曲線が入り交じった街路など。2回しか曲がっていないのにもとの場所に戻ることも。それは、中世に、地形や古代以来の神社や道路などを大きく改変することなく築かれた町並



みのぐんかみほんこうむらどうすいろず
美濃郡上本郷村道水路図。明治10年頃。

右下の部分が七尾城跡。その北と西に中世城下の地割りが残る。



雪の医光寺庭園。四季折々の美しい姿を楽しめる。

ここがポイント

- 江戸時代に城下町にならなかったため、益田には中世の町並みが残る。
- 中世を残す益田の町並みは、他の歴史ある町並みとは様子が異なる。
- 益田は全国で最も中世を伝え、味わえるまち。

みが、現代に至っているからです。益田は、全国で最も中世の遺産や町並みが伝わるまちと評価されています。時代と地域の特性を活かして輝いた益田の歴史は、中世日本の傑作と言え、その多種多様で優れた一級の遺産がまとまって伝わる益田は、中世日本を味わえるまちです。

構成文化財等

- ①櫛代賀姫神社、②福王寺、③中須東原遺跡、④中世今市遺跡、⑤大喜庵、⑥紙本著色益田兼堯像など市立雪舟の郷記念館所蔵の中世文化財、⑦市立歴史民俗資料館（旧美濃郡役所）、⑧七尾城跡・住吉神社、⑨妙義寺、⑩暁音寺、⑪中原家住宅、⑫右田本店酒蔵、⑬三宅御土居跡、⑭泉光寺、⑮萬福寺、⑯染羽天石勝神社、⑰医光寺、⑱絹本著色益田元祥像、⑲都茂鉦山跡、⑳大年ノ元遺跡、㉑神宝山八幡宮、㉒匹見の山林、㉓高津川と匹見川、㉔益田川、㉕桑原酒造、㉖鮎とうるか

※日本遺産に認定されたことによる地域活性化事業で活用する文化財等も含まれています。



つもこうざんあと
都茂鉦山跡。産出された鉦物は材木同様に中世の益田の主要な交易品であったと考えられる。

今後の取組にご期待ください

日本遺産は認定がゴールではなく、認定された後の地域活性化の取組が重要です。

日本遺産に認定されたことで、中世益田の歴史の魅力が広く認められたこととなります。今後は、中世益田の魅力をわかりやすく体験できるようにするとともに、これを活かして地域活性化を進めていきます。

今後の取組にご期待いただくとともに、ご支援くださいますよう、よろしく申し上げます。



高津川・匹見川や益田川は、内陸部と沿岸部を結ぶ重要な流通路であった。